

よなごびと

| 第34回 |

淀江傘伝承の会

押村 千里 さん



和傘に実際に触れてみて

その良さを知ってもらいたい

江戸時代から淀江で盛んに作られてきた淀江傘。今年は誕生から200年の節目の年です。淀江は和傘の一大産地で、最盛期には71軒もの傘屋がありましたが戦後、洋傘に押され昭和59年に全て廃業しました。しかし、その技術は淀江傘伝承の会によって、後世に脈々と受け継がれています。押村千里さんは次世代を担う若き職人として、淀江傘の伝承に努めています。

小さい頃から伝統的な文化や技術、ものづくりなどに興味があった押村さん。「祖母の勧めもあり和太鼓をしていました。また父の前職が大工だったこともあり、工作やものづくりが好きでした」大学卒業後は企業への就職も考えましたが、「故郷で伝

統工芸に携わる仕事がい」と、最終的には和傘職人の道を選びました。和傘を作るには大変な労力が必要。かつては分業制だった70もの行程を一通りこなします。傘の骨を作るにも種類により骨の太さなどを細かく変えたりします。「慣れるまでが大変で、初めは手が痛くてたまりませんでした」と当時を振り返ります。

青谷の和紙工房や市内の百貨店で展示会をしたとき、たくさんの方に淀江傘に興味を持ってもらえたという押村さん。「和傘の良いところをたくさん知ってもらい、たとえば洋服に和傘を組み合わせて、普段使いしてもらえようになればこの上なくうれしいです」と手応えを感じます。



女性用の蛇の目傘には、桔梗をモチーフにした美しい糸飾りを施す



竹を一本ずつ丁寧に削り、傘の骨をつくる